

# 遍歴する聖と琵琶法師

兵藤 裕己

## 1 語り物と『平家物語』

『平家物語』がつくられた時期は、『徒然草』に「後鳥羽院の御時」とある。今日の研究者のあいだでは、もう少し時代を引き下げて考える説が行なわれているが、しかし現存本のようなかたちにまとめられる以前に、その素材となった物語や説話は、さまざまな担い手によって語られていた。

しかもそれらの物語群は、個々ばらばらに存在したのではなく、すでに原作本が成立する以前の段階で結集され、私たちが想像する以上にかたちをととのえて存在した。

書物にまとめられる以前の「平家」の物語について、研究の転回点となるような仮説を提示したのは、柳田国男である。昭和十五年（1940）に発表された「有王と俊寛僧都」（『物語と語り物』所収）という論文だが、そのなかで、柳田は、俊寛の鬼界ヶ島物語に注目することから、『平家物語』の成立過程に関して一つの仮説を提示した。

俊寛の物語は、後白河上皇の側近たちによる平家討伐の謀議が露顕し、藤原成経、平康頼、俊寛僧都の三人が、九州のはるか南の鬼界ヶ島へ流されたことから始まる。

成経と康頼の二人は、その熊野信心ゆえに、中宮徳子（建礼門院）の御産にともなう大赦にあつて帰還がゆるされるが、不信心の俊寛だけが島にとり残される（巻二「足摺」）。置き去りにされる俊寛の悲劇は、能の「俊寛」や、歌舞伎の「俊寛」（『平家女護島』二幕目）として今日もよく上演されるが、『平家物語』では、そのあと成経と康頼の帰洛のことが語られ、つづいて、俊寛の侍童有王が鬼界ヶ島をたずねる「有王」「僧都死去」の章段となる。

俊寛が赦免からもれたことを知った有王は、俊寛の娘の書状をたずさえて鬼界ヶ島にわたる。そして島中をさがし歩いてようやく旧主にめぐらるあうが、見るかげもなくやつれた俊寛のすがたは、有王の目には餓鬼としか映らない。

俊寛は今まで生きながらえてきた経緯を有王に語り、また有王から、都の妻子がすでに没し、わずかに娘だけが存命であると聞かされる。娘からの手紙を読んだ俊寛は悲嘆にくれ、「自ら食事をとどめ」て、有王にみとられながら「干死」する。

はたして、俊寛が非業の死をとげてまもない治承三年（1179）五月、京都の町を辻風が吹き荒れた（巻三「辻風」）。陰陽寮の占いで、同年八月の平重盛の死、翌年の源平の争乱などが予言される。非業死した俊寛の怨霊のたたりを暗示する展開だが、俊寛のたたりを回避するには、その成仏得脱がはからねばならない。それを行なうのに最もふさわしい人物は、俊寛の娘であり、また俊寛の死をみとった有王である。

俊寛の最期のさまを有王から聞いた姫君は、尼となって奈良の法華寺にはいり、父の菩提をとむらった。有王は、俊寛の遺骨を高野山の奥の院に納めたあと、蓮花谷で出家して諸国七道を回国した。そのような鬼界ヶ島物語の成立過程について考察した柳田国男は、俊寛にまつわる事件の目撃者・報道者としての有王に注目し、語り手としての有王の問題を掘り下げたのだ。

有王が出家した蓮花谷は、高野聖の元祖といわれる明遍<sup>みょうへん</sup>によって開かれた高野山金剛峰寺の別所である。別所とは、世俗化した寺院教団をきらった僧侶が、本寺からはなれて開いた修行場である。中世の高野山では、弘法大師廟のある奥の院への参道沿いにつぎつぎに別所が開かれたが、高野山の別

所を拠点に活動した遁世僧が、いわゆる高野聖である。なかでも蓮花谷の聖は、鎌倉初期に最もさかんに活動した高野聖だが、柳田国男は、『平家物語』の話材の供給源として、その蓮花谷に注目した。

高野山の蓮花谷で出家した有王とは、まさに高野聖にほかならない。俊寛の遺骨を首にかけて回国したかれは、乞われるままに遺骨の由来を語ることもあったろう。柳田は、俊寛・有王の伝説地が各地にあることに注意を喚起しているが、柳田によれば、それらは、俊寛の物語を語りあるく有王を称する複数の高野聖が存在したことの痕跡だった。

## 2 高野聖の文学

はやく柳田国男が注目しているように、『平家物語』の登場人物には、有王のほかにも高野聖との関連がいわれる人物が少なくない。横笛との悲恋物語（巻十「横笛」）で有名な「高野の聖」滝口入道は、かれをたよって高野山をたずねた平維盛を出家させたあと、みずから先達となって維盛を熊野へみちびき、那智の沖で入水往生を遂げさせる（同「維盛入水」）。

宇治川の合戦で名馬生食いけずきに乗って梶原景季との先陣争いに勝利した佐々木高綱（巻九「宇治川」）も、晩年は高野山にのぼり、明遍を師として蓮花谷に隠棲した高野聖である。かれが建立した明遍の住房、蓮花三昧院は、蓮花谷の地名起源にもなっている。

平敦盛を討ったことで発心の思いがすんだという熊谷直実も、法然上人について出家したのち、高野山にはいつて蓮花谷の知識院に住んでいる。「一二の懸け」「敦盛最期」（ともに巻九）などの熊谷直実をめぐる一連の物語は、高野聖の物語として語りだされたものだろう。

法然に帰依した俊乗房重源は、高野山に新別所を開いたが、平家に焼き討ちされた東大寺の再建にさいしては、その大勧進（浄財をつのる勧進活動の総責任者）をつとめた。『平家物語』に「大仏の聖俊乗房」として登場するかれは、東大寺の焼き討ちの張本人、平重衡が奈良で処刑されたとき、その首を奈良の大衆だいしゆから乞うけて、北の方のもとへ送りどけていた（巻十一「重衡斬られ」）。

重衡の遺骸は茶毘に付され、遺骨は高野山へ送られたが、高野山の記録によれば、重衡につかえた侍、木工右馬允知時もくくまのじよは、主君の死後に高野山にはいり、重源が興した念仏結社、二十四蓮社友に参加したという（『高野春秋編年輯録』）。重衡の物語は、その最期のさまの目撃者であった知時（法名、円阿弥）をはじめ、重源輩下の聖たちによって語り歩かれていたことが想像される。

重衡の北の方、大納言典侍だいなごんのすけは、壇ノ浦での平家一門の滅亡後、姉大夫三位のもとに一時身を寄せたが、大夫三位の夫は、高野宰相入道と呼ばれた葉室成頼である。

成頼が平家の世をきらって高野山に隠棲したことは、巻三「城南離宮」で同情的に語られる。また、巻五「物怪の沙汰」では、かれは源雅頼の青侍がみた夢を夢解きして、平家の世が末になったことを予知している。高野山の聖たちの、物語における比重の大きさをうかがわせる話だが、しかし『平家物語』にその活躍が語られる聖は、高野山の聖だけではなかったのである。

## 3 大原、東山、西山など

京都北郊の大原（比叡山の西麓）に住んで民部卿入道とよばれた藤原親範は、後白河法皇が清盛のクーデターによって幽閉されたときに、葉室成頼とともに出家した人物である。かれの娘は、重衡との悲恋物語のヒロインとなる内裏女房だが（巻十「内裏女房」）、親範がこもった大原は、融通念仏の開祖、良忍によって来迎院が開かれて以来、念仏の聖や尼たちの集住する比叡山延暦寺の代表的な別

所だった。

大原を舞台にして語られる最も有名な話が、壇ノ浦合戦後の建礼門院の後日談である。大原寂光院をたずねた後白河法皇をまえに、建礼門院がみずからの半生を六道輪廻にたとえて回顧する物語は、『平家物語』全巻の大尾となっている（灌頂巻「六道」）。

また、大原に隠棲した建礼門院の出家の戒師をつとめたのは、『吉記』（吉田経房の日記）によれば、大原の来迎院の聖、本成房湛豪である。湛豪は、平宗盛・清宗父子が処刑されるときに、善知識（往生の手助けをする僧）として説法を行っている（巻十一「大臣殿斬られ」）。また、延慶本の『平家物語』によれば、湛豪は、わが子を殺されて物狂いとなった平経正の北の方を出家させている（第六本「経正の北方出家事」）。いずれも大原の聖や比丘尼によって語られていた物語だろう。

ほかに、京都の東山一帯、および嵯峨から大原野にかけての西山一帯も、『平家物語』とゆかりの深い聖や比丘尼の集住地だった。

たとえば、建礼門院の出家の戒師は、『吉記』に大原の湛豪とあるが、『平家物語』は、東山の長楽寺の上人、阿証房印誓としている（灌頂巻「女院出家」）。建礼門院は、出家の布施として安徳天皇の衣を印誓におくるが、印誓はそれを幡に仕立てて長楽寺の仏前にかけてたという。

現在時宗寺院になっている長楽寺には、そのときの幡というのが現存する。印誓が安徳天皇の祈禱の師をつとめ、その縁で天皇の御衣を所持していたことは、守覚法親王の日記『左記』にも記される。建礼門院の物語は、大原とはべつに、東山の長楽寺周辺でも語られていたらしい。

長楽寺にほど近い東山の双林寺は、鬼界ヶ島から帰った平康頼（法名、性照）が止住した寺院である。康頼は、双林寺にあって、説教話材集『宝物集』を編纂したが（巻三「少将都帰り」）、『平家物語』（とくに延慶本）は、作文の典拠として随所に『宝物集』を利用している。

鬼界ヶ島の物語は、俊寛の非業死に焦点をあてた有王系の物語と、康頼・成経の熊野信仰をテーマにした康頼系の物語から構成される。熊野信心ゆえに帰洛をゆるされた康頼と成経の物語は、もともと双林寺周辺の聖たちによって語られていた物語だろう。

高倉天皇に愛された小督の物語は、西山の嵯峨野を舞台にして語られる（巻六「小督」）。小督が晩年、尼となって嵯峨にかくれ住んでいたことは史実として確認されるが（『建春門院中納言日記』）、同じく「西山の奥、嵯峨」の往生院に庵をむすんだ女性の物語が、祇王と仏御前の物語である（巻一「祇王」）。

現在祇王寺として再興されている往生院は、法然の高弟、念仏房によって創建された寺院である。往生院にはまた、滝口入道が高野山にはいるまえに一時住んでいる（巻十「横笛」）。往生院周辺の聖や比丘尼のあいだでは、さかんに悲恋・恩愛の出家往生譚が語られていたらしい。

高野山にはいった熊谷直実（法名、蓮生）は、承元の法難（1207年）で師の法然が流罪になると、法然が住んだ東山の黒谷に帰り、法然の没後は、高弟の西山上人証空に師事し、証空が興した浄土宗西山派の本山、光明寺（京都府長岡京市）を建立している。熊谷は東山と西山（それ以前は高野山）をさかんに往来していたのだ。

また、滝口入道が西山（嵯峨）から高野山へ移り住んだように、念仏の聖・上人たちは各地の別所をさかんに往来していたらしい。高野山と、京都の東山、西山、大原などを往来した聖や比丘尼たちは、唱導の話材のレベルでも相互に交渉していただろう。

鬼界ヶ島の物語にしても、その発生源を一元的に高野山にもとめることには無理がある。鬼界ヶ島物語には、有王・俊寛を中心に話が展開する部分と、康頼・成経を中心に展開する部分がある。有王系（高野山系）の物語と康頼系（東山系）の物語とが相互に交渉するなかで、『平家物語』の鬼界ヶ島物語の原型はつくられたものだろう（富倉徳次郎『平家物語研究』）。

#### 4 聖と琵琶法師の接点

高野聖の有王に注目した柳田の論は、『平家物語』の話材形成のしくみに広く注意を喚起した点で画期的だった。柳田説に触発されるかたちで、筑土鈴寛、富倉徳次郎、角川源義、五来重、水原一、福田晃をはじめとする諸氏によって、『平家物語』の話材形成が論じられた。だが注意したいのは、柳田が俊寛・有王の物語に注目したのは、話材形成を論じることだけが目的ではなかったということだ。

鬼界ヶ島物語の舞台となる九州地方は、近代にいたるまで盲僧・琵琶法師がさかんに活動した土地柄である。『平家物語』によれば、赦免された成経と康頼は、帰洛の途中、一年ちかく肥前の嘉瀬庄に逗留している（巻三「少将都帰り」）。嘉瀬庄が、成経の舅である平教盛（清盛の弟）の所領だったからだが、現在佐賀市内になっている嘉瀬には、法勝寺という寺があり（俊寛がその執行をつとめた京都の法勝寺と同名である）、境内には俊寛の墓と称する石塔が現存する。柳田国男は、この嘉瀬の法勝寺こそが、肥前地方の盲僧・琵琶法師の拠点寺院だったろうと推定している。

鬼界ヶ島の物語について考えることは、柳田のばあい、『平家物語』に多くの話材を提供した高野聖に代表される聖たちと、盲僧・琵琶法師との接点をさぐる試みだった。そして両者の接点が鬼界ヶ島物語において具体的に想定されたことで、柳田の論は、いっきに『平家物語』の成立問題へ肉薄することになる。

高野山の蓮華谷が、一つの供給源であったことは、題材の方面から大よそ想像し得られるように私は思っているが、ここではまだ目の見える旅法師と座頭との連絡を模索することが出来ない。これに反して肥前は盲僧の古い根拠地で、また同業者の多かった赤間ヶ関（注、壇ノ浦の阿弥陀寺）とも近い。もうその中間に信濃前司という類の、京師の文人の介在する余地はないのである。

（柳田「有王と俊寛僧都」）

高野聖による話材形成を論じるだけなら、柳田は、熊谷直実（蓮生）や滝口入道の物語について論じてもよかった。だが、柳田が俊寛・有王の物語にこだわったのは、話材形成だけを論じることが目的ではなかったからだ。柳田にとって、鬼界ヶ島の物語は、「目の見える旅法師と座頭との連絡を模索」できる具体例として、それは『平家物語』の成立問題に直結する考察テーマだった。

しかし柳田の論に即していえば、「目の見える旅法師と座頭との連絡を模索」するなら、なにも九州にまで舞台を求める必要はなかったと思われる。

たとえば、鬼界ヶ島物語のもう一方の主役、康頼入道（性照）は、帰洛したのち東山の双林寺に住んでいる。東山は、大原や西山とともに、京都近郊の聖や比丘尼の集住地だが、康頼の双林寺をふくめた東山の八坂郷一带は、琵琶法師の八坂方（城〇を名のりとする琵琶法師の集団）の本貫の地でもあった。

当道座（平家座頭の芸能座）の伝承によれば、一方（〇一を名のりとする琵琶法師の集団）とならぶ八坂方の起源は、開祖の城玄が、八坂の塔のちかくに住んだことに由来するという（『当道要抄』ほか）。また、八坂方の琵琶法師の記録上の初見、「正珍勾当」（城珍だろう）は、八坂に住んで祇園社の社僧と交渉をもっている（『祇園執行日記』康永二年<1342>九月）。京都の東のはずれ（境界）である八坂郷には、「非人」の集住地として知られる清水坂がふくまれ、清水坂は、蟬丸とならぶ盲人芸能者の元祖、悪七兵衛景清ゆかりの地でもある（幸若舞・古浄瑠璃「景清」）。八坂郷一带に集住した琵琶法師たちは、東山の聖たちとも交渉をもったと思われる。

また、八坂方とならぶ一方の琵琶法師は、左女牛八幡の周辺に集住した「さめうしの盲目ども」（『梁塵秘抄異本口伝集』）をその前身としたらしい。かれらは、左女牛八幡にほどちかい東の市（平安から鎌倉期にかけての京都最大の盛り場）を中心に活動したと思われるが、一方（市方・都方とも表記される）という呼称の由来も、かれらが市を拠点に活動したことと関係があるだろう。

弘安四年（1281）に東の市をおとずれた一遍は、空也の市屋道場で四十八日間の踊り念仏を興行している。市屋道場には、のちに時衆（時宗）市屋派の金光寺が建てられたが、市を活動拠点とした琵琶法師たちは、はやくから市に止住した聖とも交渉をもち、その縁によって時衆とも密接な関係をもつようになる。畿内を中心とした琵琶法師の広汎な座組織、当道座を南北朝期に形成したのも、時衆の聖と結びついた一方派の琵琶法師たちだった（拙著『平家物語の歴史と芸能』吉川弘文館、2000年）。

「目の見える旅法師と座頭との連絡」、すなわち遍歴の聖と琵琶法師との接点は、じつは京都周辺にも少なからず存在したのだ。念仏の聖や比丘尼たちの唱導の物語は、はやくから琵琶法師のレパートリーに組み入れられたろう。

琵琶法師に管理されたさまざまな物語は、「平家」の物語としてのストーリーをたくましくして構成する。できごとの語りは相互に牽引しあうことで、話材じたいがストーリーの長編的展開を保証するのである。

個々の語りが複合・長編化してゆく過程には、柳田国男がいうように、たしかに「信濃前司といふ類の京師の文人の介在する余地はな」かったと思われる。そのような前「平家」の物語群がはやくから琵琶法師によって担われていたとすれば、『平家物語』の構成や文体の秘密も、琵琶法師のシャーマニックな職能と不可分の問題として読みとかれる必要があるのである。

<参考文献>兵藤裕己『琵琶法師—<異界>を語る人びと』（岩波新書、2009年）